

川端康成の文長指数

中 根 千 賀 子

川端康成は、現代日本の作家中、最も美しい文章を書くこと一般に思われている作家である。私も、その文章が好きであり、かねてその特色を、少しでも科学的に調べてみたいと考えていたのであるが、ここに、波多野完治氏の文章心理学の助けを借りてささやかな調査を試みた報告が、この小文である。

資料としては、「川端康成全集第六卷」（新潮社版）を用いることとした。（同巻には、「掌の小説」百篇が収められている。）調査の方法は、

- ① 「第六卷」全部で四百頁あるが、各頁一文の割合で抽出する。文章は、各頁最後の完全なる文章とする。会話文、引用文、又はその入るものは省く。
- ② 短篇百篇なので、最後が普通の頁の終りの行まで来ていない所は全部頁数に入れない。会話文のみからなる頁も除外する。そこから調査の対象になる文章は、小説の他の文三百個となつた。
- ③ 三百個の文章について、書き出しから「、」まで、「、」

から「、」あるいは「。」までの字数を明記する。

④ 三百個の字数を合計し、その平均を算出する。

⑤ 三百個の文章の同字数同士、同項にまとめ統計する。それを、「〇—四」「五—九」「十—十四」の様に五字ごとに切つてその頻度数を計算する。

⑥ 度数分布表をもとにして、文長標準偏差を算出する。

⑦ 「掌の小説」五篇について以上①～⑤までを統計算出し、標準偏差の代りに、各々の文長プロフィールを作る。

という方法をとつた。さて、その結果、私が知り得たことは、次のようなことである。

(A)、三百文の平均字数は二八・五字である。これによつて彼の文章の長さの平均がわかつた。二八・五字は波多野完治氏が調べられた現代小説の平均字数三四・五字同氏著（「現代文章心理学」参照）にくらべて、いちじるしく短い事がわかる。また、彼の文章はあまり度はずれした長さの文は少ない。最もよく使用される文長は十五字ないし二十字台なのであつて、字数の度数表を掲げると、

次のようになる。

字数	文数
5	2
6	1
7	4
8	1
9	6
10	3
11	3
12	8
13	10
14	11
15	8
16	11
17	9
18	10
19	16
20	12
21	11

22	7
23	13
24	11
25	5
26	5
27	6
28	8
29	7
30	3
31	8
32	7
33	8
34	4
35	5
36	3
37	7
38	5
39	3
40	6
41	3
42	2
43	3
44	3
45	1
46	3
47	4
48	
49	1
50	1
51	3
52	1
53	1
54	2
55	1
56	6
57	
58	3
59	3
60	
62	2
63	
64	1
65	1
66	1
75	1
78	1
81	1
82	1
92	1
98	1

この表示によつてわかるごとく、二十字前後の文章が、川端の息に最もよく合う文章といえるようである。その字数の文を、『滝』から引用してみよう。

。弟の直治は二人の兄と大分年が離れている。(十九字)

。無論そのつもりだと直治はいきまいている。(十九字)
。相手は私に見せた小説のなかの娘であつた。(十九字)
。下の兄の言うことはほんとうだつたのだろうか。(二十一字)

これらの文で、まず氣のつく事は句読点のない一続きの文章だということである。修飾語的な表現が少なく、それは「弟の直次」とか「大分……離れていた」とか「私に見せた小説の中の娘」というように、具体的な言葉であつて、抽象的な概念を示す様なものは、右の例においては皆無である。また、「私に見せた小説の中の娘」の如き、普通二文の内容を、修飾語利用により一文にまとめている。

(B)、文長指数は八三(八二・六)である。それは、文長平均同士の比較をより明白にする為に、

$$V = \frac{\text{個々の作家の平均字数}}{\text{同士の平均字数}} \times 100$$

という式によつて算出されるものであるが、川端康成の文長指数を、他の作家と比較するとどういうことになるであろうか。いま、『現代文章心理学』百六十三頁第二表に示されている諸作家と対比してみると、次のような結果が現われる。

次掲の表から、まずわれわれの注意をひくことは、川端康成と芥川龍之介との共通点が非常に多いということである。

二人は、平均字数を同じくし、他の誰よりも短い文章を書いている。ただ、龍之介は、他の作家よりも目立つて標準偏差が低いのに対して、康成は、短文にもかかわらず、相当の変

文長指数	作 者						
	康 成	龍之介	春 夫	潤一郎	藤 村	鷗 外	
平 均 字 数	28.5	28.5	38.1	65.6	37.1	31.0	
文 長 中 数	24	26	31	61	31	27	
平 均 句 数	1.8	1.3	2.03	3.8	3.3	2.2	
句 長 平 均 字 数	16.1	18.5	19	17.2	15.8	14.4	
文 長 標 準 偏 差	21.4	10.7	27.2	32.5	21.1	21.9	
文 長 指 数	83	83	110	190	108	90	

(c) 化を示している。
 変化係数は七五・一である。どんな風に長い文章と、短い文章を交ぜて行くか。この点に作家の苦心と秘密が横たわつていとも言えよう、その変化の幅を知るのが標準偏差である。変化係数は、 $V = \frac{G}{M} \times 100$ から求められる。Mは作家の平均字数、Gは標準偏差を示す。そこで変化係数により各作家が、自分なりにどの程度の文章変化をおこなつているかを知る事が出来る。康成と他の作家達のそれ(『現代文章心理学』参照)を比較して見よう。

作品名	制作年時	平均字数		文長中数		会話文の割合(%)	平均句数	平均字数
		地の文のみ	会話文を含む	地の文のみ	会話文を含む			
		28.5	—	24	—	—	1.8	16.1
男と女と荷車	大正12・4	37.2	17.1	34	12	約74	2.3	16.4
写 真	大正13・10	23.9	—	21	—	0	2.0	11.9
愛 犬 安 産	昭和10・1	26.4	24.2	20	19	約19	2.4	11.0
足 袋	昭和23・	25.6	22.5	24	19	“26	1.9	13.6
流	昭和25・5	34.3	31.2	28.5	28	“36	2.3	15.0

(F)、「掌の小説」のうち、五篇の作品
 康成は誰よりも多く変化ある文章で小説をつつづけていることがわかるのである。
 (E)、文長中数は二四字である。現代小説の平均は二七字である。彼の文章は二四字を中心に長短同数ずつ存在する。これは余り意味をなさない数字だと私は思う。しかし、この数字も、彼の文章が最も短い事をはつきりと示している。

康成	75.1
龍之介	37.5
春夫	71.4
潤一郎	49.5
藤村	67.8
鷗外	70.6

について、前頁のごとき統計を取つてみた。なお、各篇の字数分布表も作成してみたのであるが、その表示はここには略すこととして、康成の文長指数は年代によるはつきりとした変化は認められないといひ得るようである。三島由紀夫氏は、川端康成について述べたなかで、「川端さんが名文家であることは正に世評のとおりだが、川端さんがついに文体を持たぬ小説家であるというのは、私の意見である。なぜなら小説家における文体とは、世界解釈の意志であり、鍵なのである。混沌と不安に対処して、世界を整理し、区劃し、せまい造形の枠内へ持ち込んで来るためには、作家の道具としては文体しかない。

立原道造について

短歌から詩歌へ周到な準備を行ないつつ転換していつた立原は、その後もあくことなく自分の「詩」を、その精神的發展の途上において自分自身の気持と重ね合わせることによつて追い求めた。淡々とした自己陶酔の歌を歌いたい為。それでは立原のわずかなばかりの詩作期間——四年間——の間に自

(中略)ところで、川端さんの傑作のように、完璧であつて、しかも世界解釈の意志を完全に放棄した芸術作品とは、どういふものなのであるか？それは実に混沌をおそれない。不安をおそれない。……」〔「永遠の旅人」〕といつてゐるが、康成の完璧ともいえる美しい文章の秘密は、以上の調査の結果にも、いささかのぞかれたであらうか。この小文は、初めにもしるしたように、波多野完治氏の文章心理学の方法を学び、康成の文章にかすかな照明を当ててみたものにすぎない。私の創見といえるほどのものは何もない、ささやかなこの調査が、康成の美しい文章の秘密を少しでも照らしておれば幸いである。

吉 田 玲 子

己陶酔の歌を歌うことが出来たであらうか。

ここに一冊の本が机上にある。その中に、いわゆる立原の、世界が書きとめられている。

現代詩の世界にのこされたひとつのやさしい歌——本然的といつていいほどの青春の抒情を語るとすれば、それには